

幼児の遊びと概念形成過程

— 言語発生と動作出現との関連 —

野村 晶子

目 的

幼児にとって、生活そのものである遊びを通して、緒機能（運動・情緒・知能・社会性）は、分化・発達するのであるが、筆者は、これ迄に、幼児の自然発生的な遊びを観察・収録し（一人遊び、Group遊び）、「思考と言語の系統的発生において、知能発達に於ける、前言語的段階と、言語発達に於ける前知能的段階を確認できる」という J I. C. В Ы Г О Т С К И Й の仮説、その「変革期」は、我が国の幼児では、平均的には4才児の時点である（「幼児の遊びに関する分析的研究（Ⅱ）」野村晶子、立正女子大学短期大学部紀要、1974。「幼児のあそび」幼児の教育、日本幼稚園協会、1970 etc…に於いて。）ことを指摘してきたのであるが、今回は殊に、遊びの中での言語発生と動作出現を取りあげ、概念形成過程について、分析・検討を加える。

方 法

①対象児…2才から7才までの幼児400名（男児181名、女児222名） ②期間…昭和44年から現在も継続調査中であるが、今回は基礎資料としての昭和45年度、46年度の結果を検討する。③調査地域…沖縄から北海道まで（全国）。

結果及び考察

（Table 1.）言語発生数（昭和45年度）N=219

※（ ）の中は実数を示す。

年齢 性別	2	3	4	5	6	7	Total	\bar{X}	S. D
M	20.5 (205)	13.4 (377)	52.1 (744)	23.4 (562)	21.6 (324)	25.7 (335)	156.7 (2547)	22.4 (363.8)	1.55
F	16.6 (249)	17.4 (470)	26.2 (446)	21.3 (490)	32.3 (678)	20.8 (250)	134.6 (2583)	19.2 (379.0)	1.58
Total	37.1 (454)	30.8 (847)	78.3 (1190)	44.7 (1052)	53.9 (1002)	46.5 (585)	291.3 (5130)	41.6 (732.8)	1.56
\bar{X}	18.5 (227.0)	15.4 (423.5)	39.1 (595.0)	22.3 (526.0)	27.8 (501.0)	23.8 (297.5)	146.9 (2565.0)	20.8 (366.4)	

(Table 2.) 言語発生数 (昭和 4 6 年度) N=184

※ () の中は実数を示す。

年齢 性別	2	3	4	5	6	7	Total	\bar{X}	S. D
M	25 (451)	26 (434)	24 (618)	29 (428)	13 (143)	12 (88)	129 (1762)	21.5 (293.6)	1.48
F	16 (470)	26 (613)	23 (434)	16 (200)	19 (186)	24 (313)	124 (2216)	20.6 (369.3)	1.70
Total	41 (921)	52 (1047)	47 (652)	45 (628)	32 (329)	36 (404)	253 (3978)	42.1 (663.0)	1.64
\bar{X}	20.5 (460)	26.0 (523)	23.5 (326)	23.5 (314)	16.0 (164)	18.0 (200)	121.5 (1989)	21.0 (331.5)	

(Table 3.) 動作出現数 (昭和 4 5 年度) N=219

年齢 性別	2	3	4	5	6	7	Total	\bar{X}	S. D
M	25.6 (256)	14.2 (412)	35.6 (699)	17.9 (430)	17.9 (269)	15.3 (200)	126.5 (2266)	18.0 (323.6)	1.54
F	14.7 (221)	14.9 (400)	22.5 (384)	19.0 (439)	17.4 (367)	56.0 (672)	144.5 (2483)	20.6 (354.7)	1.64
Total	40.3 (477)	29.1 (812)	58.1 (1083)	36.9 (869)	35.3 (636)	71.3 (872)	271.0 (4749)	38.7 (778.4)	1.56
\bar{X}	20.1 (238.5)	14.7 (406.0)	29.0 (541.5)	18.4 (434.5)	17.6 (318.0)	34.8 (436.0)	134.6 (2374.5)	19.2 (339.2)	

(Table 4.) 動作出現数 (昭和 4 6 年度) N=184

年齢 性別	2	3	4	5	6	7	Total	\bar{X}	S. D
M	32 (575)	25 (430)	36 (328)	25 (366)	25 (279)	24 (171)	167 (2149)	27.8 (358.1)	1.67
F	31 (897)	29 (696)	25 (486)	24 (289)	19 (188)	50 (650)	178 (3206)	29.6 (534.3)	1.87
Total	63 (1472)	54 (1126)	61 (814)	49 (655)	44 (467)	74 (821)	345 (5355)	57.5 (892.5)	1.79
\bar{X}	31.5 (736)	27.0 (563)	30.5 (407)	24.5 (347)	22.0 (233)	37.0 (410)	172.5 (2677)	28.7 (446.2)	

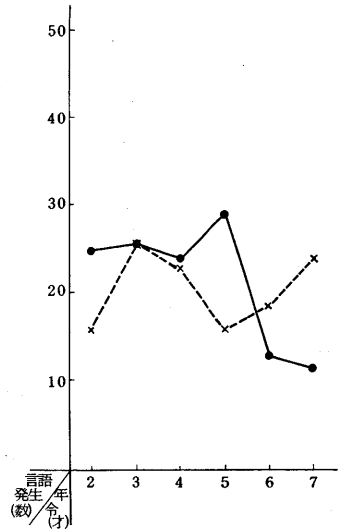
幼児の自然発生的な遊びの中での言語発生数は、(Fig. 1)に示す通りであるが、4才児の時点で低下の傾向が、男・女児共にみられる。しかし、男児では6才、7才と言語発生数は最も少なくなるが、女児では5才の時点が最も低下している。これに反し、(Fig. 2)に示されたように、動作出現数は男・女児共に4才児の時点がピークである。次いで、2才児の時点を見てよいであろう。又、これらの現象は、(Table. 5), (Fig. 3)にも、みられるように、遊びの種類の優位性についても興味ある傾向がみられた。即ち、男・女児共に、言語性の優位な遊びは3才児の時点が

ピークで4才児では急激に下降している。又、動作性の優位な遊びは男児では2才児の時点がピークで5才児がそれに次ぐ二峰性を示している。女児では、3才児がピークで、動作性の最も低い遊びは6才児の時点にみられる。即ち、本報告では、かつて、乳児期にみられたように中枢支配に依り「運動機能の発達即ち、受接—調節—効果のシステムが、体制化される時点では、言語化の過程で、ある種の退行現象がみられる。」と指摘した東氏の仮説を、幼児期についても、自然発生的な遊びを通じて、みい出し、支持するに至ったことは収穫であったように考えられる。即ち、自然発生的な遊びの中での動作出現数の最も多いのは4才児の時点で、次いで、2才児の時点とみるのであるが、これら、動作出現数の多い時期には、すでに、新し

(Fig.1.) 言語発生数

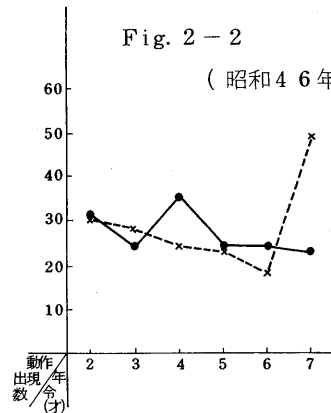
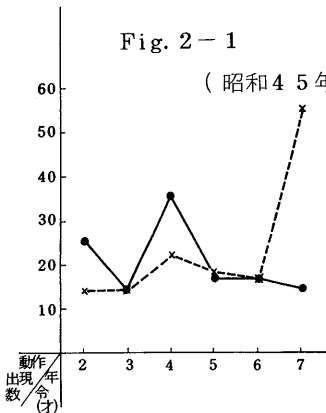
Fig. 1.

(昭和46年度) N=184



(Fig.2.) 動作出現数

●——● 男児
x---x 女児



い動作は獲得された時点であるとみてよいであろう。即ち、二峰性の内2才児のピークは、その発現→体制化はすでに乳児期に確立され、それが、チェック・修正される第二段階としての動作の確立の時期(発現→体制化)は3才児の時点であったのであろう。これに反し、言語発生数のピークは、男児では5才児の時点、女児では3才児の時点であり性差が明確にでている。ただ3才児の時点は、男・女児共に

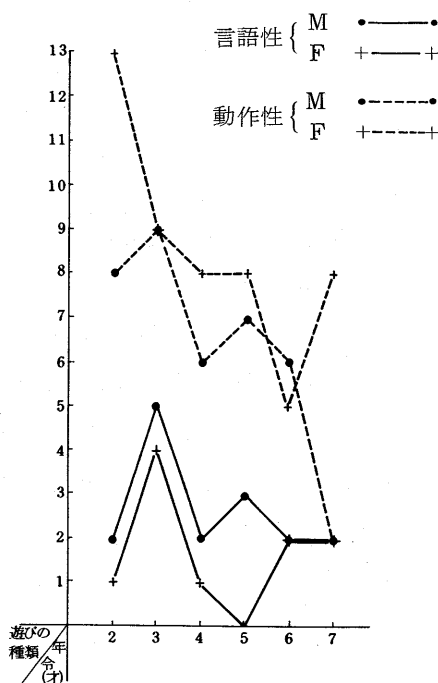
(Table 5.) 遊びの種類の優位性(言語性:動作性) (Fig.3.) 遊びの種類の優位性
(言語性:動作性)

年齢 性別	2	3	4	5	6	7
M	2:8	5:9	2:6	3:7	2:6	2:2
F	1:13	4:9	1:8	2:5	2:5	2:8

発語数は多いとみてよいであろう。即ち、3才児の時点が、幼児語(自己中心性言語—外語)の完成期集団内独語でもあり、自然発生的な遊びの種類も言語性の優位のもので、多くなされ、同時に発語数も多くなるのであろう。又、男児での5才児の時点、女児での7才児の時点が、それぞれ言語発が多くなるが、勿論、この時期は、コミュニケーションの手段としての外言(外語)で、すでに「変革期」を経ているものと推察される。即ち、Piaget. J. の社会的言語へと進展しているのである。(3才児の時点での外語に対して)又、外語(自己中心性言語)—外語(社会的言語)の間には、内語(必ずしも具体的発声のない自分との対話)の過程があり、その過渡期を、言語と思考の融合する転換期(変革期)とみる。又、この時点を男児では4才児、女児では5才児の時点であると推察される。即ち、言語的媒介過程では、再構造化の時期には反応数の低下現象のみられるのは妥当であると考えられる。即ち、概念形成の過程のただ中にあることを指摘したい。

結 論

幼児の自然発生的な遊びを通して、その言語発生数と動作出現数をみると、我が国では4才児の時点が、Vygotsky, L. S. の「変革期」即ち、言語と思考の融合する時期であると指摘して来たのであるが、今回は、特に、動作出現の多い時点では言語発生は少なく、退行現象をみた。しかし、いわゆる「自己中心性言語」—(外語)の完成期は、男・女児共に、3才児の時点にみられ、又、「社会性言語」—(外語)は男児では5才児、女児では7才児の時点であり、性差がみられた。又、



内語の時点は、男児では4才児、女児では5才児の時点であると推察され、その時期が言語と思考の交わる時点「変革期」であり、言語・思考の再構造化の時点で、この時期には言語発生数の低下することを指適したい。即ち、概念形成の過程にあるというのが妥当であろう。

文 献

1. Vygotsky, L. S., *Мышление и Речь*, 1956.
2. Piaget, J. *Le Langage et la pensée chez l'enfant*, Delachaux et Niestle', 1948.
3. ペンフィールド(上村他訳), 「言語と大脳」, 誠心書房, 1965.
4. 東洋, 「思考と言語」, 東大出版, 1970.
5. 野村晶子, 「遊びに関する一考察」, 日本保育学会大会論文集, 1970.
6. 野村晶子, 「幼児の遊びに関する分析的研究」I II, 立正女子大学短期大学部紀要, 1971, 1974.
7. 野村晶子, 「幼児のあそび」, 日本幼稚園協会, 1970.